

「障がいのある方専用のフィールドがあるといいですね」。ノルディック・ウォークやスキーをゲストと楽しむ私たちの活動を見て、時々こういう声をいただきます。

確かに、さまざまな不便のあるアダプティブ(障がい者)にとって、専用の施設であれば使い勝手はいいでしょう。でも、フィールドやゲレンデを「アダプティブ専用」にすることは、本当に良いことなのでしょうか。



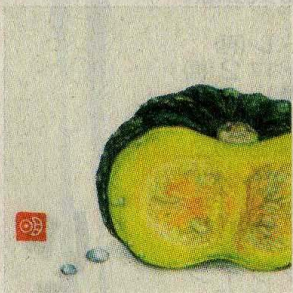
各地のウォーキング大会などに行くと、アダプティブの参加を対象にした短距離のコースが設定されていることもあります。そもそも、なぜ分けよう。なぜ短距離なのでしょう。なぜ短距離なのでしょう。

もし、スキー場のゲレンデで「アダプティブ専用」があって、ほかの人が誰もいなかったらどうでしょう。以前は友人と一緒にスキーをしたりハイキングしたりしてきたのに、障がいを負った途端に分けられるとしたら、つまらないですよ。ウォーキングやスキーをすることだけが目的ではないはず。大切なのは「同じ場所と同じことをする」こと。それが「楽しい」レジャーに結びつくと考えています。

同じ場所で同じことを

たとえばディズニールンドが楽しいのは、同じ空間と同じ時間を若男女の誰もが共有できるから。そのために年代に関係なく楽しめるよう、受け入れ側が考えているからではないでしょうか。

楽しいレジャーを演出するためには、さまざまな知識や工夫が求められます。湯沢町のあるペンションには、廊下に板とブロックで作ったスロープがあります。風呂には湯船に入りやすいよう、洗い場に腰掛け台が据え付けられています。



す。車いす常用の人から教えてもらって作ったそうです。

全部ご主人のお手製。このペンションには車いすの常連さんがたくさんいます。そのような努力こそ、相互理解を深めることにつながってゆくのだと思います。

周りの人と同じことがしたいのは小さな子供だけではありません。誰もが人と交わりながら、ひとときを楽しみたいのです。